

ポパーの世界3における言語的実体の存在について

池田 健人 (Kento Ikeda)

大阪大学人間科学研究科

本発表の目的は、カール・ポパー (Karl R. Popper, 1902-1994) によって提案された世界3概念のうちに位置を占める言語的実体は、いったいいかなる理由からその身分を付与されるのかを示すことである。

ポパーは、有意味性の基準に対して激しく批判を加えた20世紀の科学哲学者としてよく知られている。ポパーにとって、有意味性の基準に照らして形而上学を無意味なものであるとみなすことは、同時に自然科学までも無意味なものにしてしまうことであった。それゆえ、形而上学のみを排除した純粋な自然科学というものはない。それらのあいだには区画 (demarcation)こそあれ、どちらも意味をもつという点については変わらない。

このような思想を背景に、ポパーは形而上学と自然科学の両者を世界3に分類し、三世界論と呼ばれる主張を展開した。三世界論とは、物理的対象または物理的状態の世界 (世界1)、意識の状態、または心的状態、行動性向の世界 (世界2)、そして思考の客観的内容の世界 (世界3) という少なくとも3つの世界が存在論的に区別されうるとする主張である。この議論における主眼は世界3の導入にある。ポパーは、物理世界と精神世界に加えて導入される世界3の存在者として、算術的ないし幾何学的対象をはじめとする可知的対象、客観的意味における観念、たんなる数のような普遍的概念または観念、雑誌や書物、叢書の内容のような客観的論理内容などを挙げている。一方で、ポパーは、理論や推測、問題、議論などのような言語的実体もまた世界3の存在者であると述べる。

しかし、この主張には一貫性が欠けているのではないだろうか。なぜなら、世界3とは思考の客観的内容の世界であると説明されていながら、それとは両立しえないように思われる言語的実体もまたその存在者として含むものだからである。クレムケによると、言語的実体はあくまでも世界1の特殊領域ないし世界4に分類されるべき特別な物理的対象あり、世界3には思考の客観的内容のみが属する。

ところで、上述のような世界3の存在者にかんする主張は、ポパーの三世界論のなかで繰り返し強調されるものである。これは、換言すれば、ポパーは世界3における言語的実体の存在を積極的に肯定しているということである。そのように考えると、クレムケの主張は三世界論の欠陥を指摘し洗練するものであるというよりは、むしろその内実を正確に捉え損なっているものであるということができるかもしれない。

三世界論を正しく解釈し、それに適切な評価を与えるためには、その一環としてこの点を明らかにすることは重要である。それゆえ、本発表では、ポパーがどのような理由で思考の客観的内容の世界である世界3に言語的実体の存在を認めたのか、ということについて検討する。